

対話から生まれる椋鳩十文学の感動  
～「ああ公」を軸とした深く学び合う読書～

府中市立南小学校  
第6学年 浦上 璃子

対話から生まれる椋鳩十文学の感動

「ああ公」を軸とした

深く学び合う読書

府中市立南小学校 六年 浦上 瑠子

「思えば「ああ公」は、わたしという人間に  
めぐりあつたため、一生を、不幸なクラス  
として終わつてしまつたようです。」  
この作品の、最後の一文は、私の心に重いも  
のをドスンと残した。

「そうなの、ああ公。君は本当に不幸だつた

### 広島県府中市立南小学校

の、不幸な一生だつたの。  
と、できるなら今すぐ、「ああ公」に心の中を  
聞きたい気持ちで、「はい」になつた。

「ああ公」はカラスの名前である。主人公

である。「わたし」が、まだひなだつたカラス

を、村の子どもたちから引き取り、愛情い

ばいに育てたのである。その結果、自然の中

で生きぬく力を失い、ついにはひとり死んで

いくという悲しい結末の物語である。

確かに「ああ公」の最後は、飼い主である

わたしの家の屋根うらで、カナカナになつて  
 死んでしまふという、悲惨な結末だ。私もそ  
 のシーンを読む時、「ああ公」のかわいそう  
 な姿と、飼い主の驚きと悲しみの姿が頭に浮  
 かんできて、思わず涙がこぼれそうになつた。  
 「ああ公」はどんな気持ちで、長い間、飼  
 い主を待ち続けたのだろうか。だんだん細く  
 なつていく。「ああ公」の飼い主を呼ぶ泣き声  
 が聞こえるようで、せつなくて、胸が苦しく  
 なつてくる。

広島県府中市立南小学校

だが、その最後のシーンだけで、「ああ公」  
 は不幸なクラスと言いつれれるのだろうか。  
 読み終えて、本を置き、いろんな想いが私の  
 中をかきめぐつた時、ふと、昨年の地域の人  
 と開いた「コミュニテイ・スクール（CS）  
 読書会」で出会った人たちの顔が浮かんでき  
 た。この作品の「ああ公」の一生を、あの大  
 人たちはどう語るのか、と考えてみた。  
 同じ作品を読んでも、読後感はそれぞれち  
 がう。性別も、経験も、年齢も異なれば、感

広島県府中市立南小学校

じ方や物の見方が変わっても当然のことなのだ。昨年のCS読書会は、そのことを教えてくれた。  
 読書会で選んだ本は、南アルプスが舞台のワシとりよ。う師の対決を描く、椋鳩十作品の「最後のワシ」に。開拓を進める人間に追いやられ、ワシはりよ。う師が追い立てた獲物をねらう。困ったりよ。う師は、ワシの片翼を撃ち落とし生け捕りにする。おりに入れられたワシは、人間が与えたえさを一切食べず、おりにかみついたまま息絶えるというストーリーだ。話し合いのテーマは、「ワシは鉄ごうしにかみついて何と言ったか」で、みんなで自分の考えを出し合った。  
 私たち子どもは、「このおりをかみ切った外に出てやるよ」ともう一度、あの大空を自由に飛んでやるよ」という意見が多く出た。  
 しかし、大人たちは、「人間のほどこしは受けないという反抗心」を「空を飛んでいたころがなつかしい。もう飛べないというかと

う。という意見が出た。

森の王者の最後をどう読むか、大人と子どもと解釈が大きく分かれたのがとても印象的だった。

私は、さすがが大人。森の王者としての堂々とした姿に心動かされたんだな。と感心しながらうなずいたのを覚えている。でも、大人たちは、子どもは前向きで希望をつないでいる。子どもたちは、いつも未来を見つめていてすばらしい。と私たちを認めはげまして

### 広島県府中市立南小学校

くださった。おたがいの意見や考え方を交流すること、大人も子どもも、どちらも学びあった読書になったという満足感なんだか気持ちよかった。読書は一人で黙ってするもの、というイメージが大きく変わり、読書と対話がつながれば楽しい、ということを知った。

5年生の授業でした。大造じいさんとガンの読書会。大造じいさんと残雪は心が通い合ったか、というテーマで話し合った時も、クラ

広島県府中市立南小学校

スの意見は割れた。「二人の心は通い合った  
 という私と」「賢い残雪は二度と仲間を連れ  
 て帰ってくることはない」という意見との間  
 で、ゆれていろ私がいた。  
 残雪の仲間を守る堂々とした生き方に感動  
 した大造「いいさんは、残雪の世話をし、大空  
 に帰してやる。「人間の心を変えることがで  
 きた残雪だからこそ、大造「いいさんの気持ち  
 が分かって、飛び立った」という私。でも  
 友達は、「野性の残雪にそんなあまさはない

生きるか死ぬかの戦いの日々の中で、大造「  
 いさんの気持ちも分かっていたら、死んでし  
 まう。仲間を守ることは、二度と大造「いいさ  
 んのところは姿を現わさないことだ」と読ん  
 でいた。  
 CSの読書会も授業での読書会も、どちらら  
 が正しいかという読み方はしなかった。人間  
 と動物の愛を読むのか、野生動物のきびしい  
 孤独な生き方を読むのか、視点が変われば作  
 品の世界が変わって見えてくる。

あの時、私は他の意見を聞いて、自分の考えを作り直していく楽しさを、教えてもらったと思う。自分の考えを創り出すため、どの文や言葉を根拠にしていくのか、学び方も知たのだ。

ではこの「ああ公」の作品をどう読めばいいのか。視点を変えて読んだらどうなるのか、今回は自分自身と対話しながら、作品と向き合うことにした。

私には最後の一文にこめられた、飼い主の

広島県府中市立南小学校

「わたし」の気持ちもわかる。それでも「ああ公」は、ひなのカラスの時に、「わたし」に助けられ、大切に育てられたのだ。この助けられたひなのカラスは、すっかり「わたし」を、つまり、人間に「あまえること」を覚え、てしまったのだ。愛の通い合である。だからこそ、飼い主は自然にもとそうとして必死になつたのである。これもまた「ああ公」への大きな愛である。しかし、この愛が、「ああ公」の屋根うらの孤独死に結びついたのは

広島県府中市立南小学校

事実である。飼い主の、不幸なクラスにして  
 しまつた。というなげきはわかる。  
 でも、「ああ公」は飼い主との愛い「ばい  
 の思い出に包まれて、飼い主への感謝の中で  
 静かに息をひきとつた。とは、読めないだろう  
 か。不幸なクラスで終わらせるのは、あまり  
 にも悲しい。確かに、自然の中で生きる力は  
 失つたけれど、こんなに優しい人間がいる、  
 と知ることができた。一生は、幸せなクラスと  
 いえないだろうか。どちらかであると決めき  
 れない私が今ある。  
 「不幸」か「幸せ」かの結論がゴールでは  
 なく、どっちであろうと、自分なりの問いと  
 答えを持ちながら読むことは楽しい。考え続  
 けることが「作品を読む」ことであり、そこ  
 から始まつて、やがては「自分自身を読む」  
 ことにつながつていくのではなからうか。読  
 者である私が「ああ公」という作品に出会  
 、「ああ公」の一生に思いをほせ、人間と動物  
 の関係について考えているこの一瞬こそが、

広島県府中市立南小学校

「ああ公」の幸せにもつながるのではないが、  
とも思えてきた。

同じ作者の作品でも、出てくる登場人物も

設定も出来事もちがう。しかし、椋鳩十の動

物文学は、どの作品も、ひたすら、動物への

やさしさや尊敬に満ちている。ウマの物語も

大やカワウソの物語も、動物の勇氣、知恵、

いのち、愛など描かれて、いるが、どれも、人

間をこえるはく力があり、そのスケールは深

く大きい。読書会で意見が決してひとつにま

とまらないことこそ、テーマが作品世界の底

に流れる人間の生き方の追求であることだと

いえるのではないだろうか。そして、それを

考えることは終わりが無いということを、椋

鳩十が私たちに問い続けているのだ。つまり、

一生物の課題との出会いとも言える。

これからも、椋鳩十作品に限らず、これで

良い、これで分かった、というひとりよがり

の読みや考え方で止まる読書ではなく、作品

を通して出会った、動物や人物が教えてくれ

る人間の生き方を、「コミニケーションする読書」という形で読み広げたり、読み深めたりしていきたい。

ひとりで読む読書も楽しい。読書仲間が読み合う読書も、いっそう楽しい。

読んだ本

「さいごのワシ」

椋鳩十 あすなろ書房

広島県府中市立南小学校

「ああ公」

椋鳩十 ポプラ社

## 指導者の言葉

本校は、主体的・対話的で深い学びを実現する読書活動の工夫として、様々な読書体験と結び付けることを大切にしている。読書は「資質・能力」全体に関わるものであるが、特に、「学びに向かう力，人間性」の涵養に大きく関係すると考えているからである。

この作品は、夏休みの課題の一つとして取り組んだ読書感想文である。児童は、5年生の時に学習した「大造じいさんとガン」や、コミュニティ・スクールの読書会で読んだ「さいごのワシ」の感想を交流する中で、読書と対話がつながることの楽しさや読むことの深まりを実感した。その体験を受け、椋鳩十の作品に興味・関心を持ち他の椋鳩十の作品も読み進めていった。

そして、国語科の授業や読書会を通して学んだ「視点を変えて読むこと」や、「自分なりの問いと答えを持ちながら読むこと」を活かしながら、椋鳩十の「ああ公」の感想を自分の言葉で表現していった。

指導に当たっては、次の3点に留意させた。

一つ一つの作品の見方・考え方を整理して書く。

国語科の学習や読書会を通して学んだことを具体的にまとめる。

自分の中で深まった考えを文章構成を工夫してまとめる。

読書会の経験が、本を通して人とつながりたいという気持ちを育て、児童の読書意欲を育んでいることが伝わってくる。また、同じ作者の作品を読むことを通して、作品に込められた思いをより深く感じ取り、自ら問い続けながら考えていったことを素直に言葉で表現することができた。読書の広がり楽しさを改めて教えてくれる作品である。